

《註釈》

1) マルセル・デュシャン[Marcel Duchamp]1887-1968

フランス生まれの美術家、のちにアメリカ国籍を取得。代表作として「大ガラス」や、既製品と呼ばれる便器にサインだけをした作品、またデュシャンの死後に発見された「遺作」など、20世紀以降の美術に決定的な影響を残した。画家として出発したが、油彩画の制作は1910年代前半に放棄した。チェスの名手としても知られている。2人の兄、ジャック・ヴィヨン[Jacques Villon, 1875-1963]とレイモン・デュシャン＝ヴィヨン[Raymond Duchamp-Villon, 1876-1919]も美術家。

2) オクタビオ・パス[Octavio Paz] 1914-1998

メキシコの詩人、批評家、外交官。著書に『マルセル・デュシャン論』"Marcel Duchamp ou le chateau de la pureté" (1968年)、『クロード・レヴィ＝ストロース』"Claude Levi-Strauss" (1967年) 他

3) 『マルセル・デュシャン論』p73 純粹の城

書肆風の薔薇, 1991 著:オクタビオ・パス 訳:宮川淳・柳瀬尚紀

4) レオン・バッティスタ・アルベルティ[Leon Battista Alberti]1404-1472

初期ルネサンスの人文主義者、建築理論家、建築家。専攻分野は法学、古典学、数学、演劇作品、詩作であり、また絵画、彫刻については実作だけでなく理論の構築にも寄与する。多方面に才能を発揮し、ルネサンス期に理想とされた「万能の人」の最初の典型と言われた。確実に彼に帰属するとされる絵画、彫刻は現在のところ伝わっておらず、「芸術論」や「絵画論」また「建築論」など、様々な分野で芸術理論を構築し後世に影響を与えた。

5) ディエゴ・ベラスケス[Diego Rodríguez de Silva y Velázquez] 1599?-1660

バロック期のスペインの画家。スペイン絵画の黄金時代であった17世紀を代表する画家。フェリペ4世付きの宮廷画家となり、国王や王女をはじめ、宮廷の人々の肖像画、などを多数描いている。代表作として《鏡の前のヴィーナス》(1648-51)、《侍女たち(ラス・メニーナス)》1656 他

6) ゴードン・マッタークラーク[Gordon Matta-Clark] 1943-78

アメリカ合衆国 ニューヨークのアーティスト。建築出身のコンセプチュアル・アーティストである。チェーンソーで家を真っ二つに切断するなど、斬新なパフォーマンスで知られる60-70年代のNYソーホーの最初のアーティストの1人。35歳で死を迎えた。

7) 肋骨交差穹窿

ゴシック建築の工法技術の一つ。これにより穹窿部の重みを柱で効率的に支えることが出来るようになった為 壁面に

かかる負担が減り、窓を大きく取る事が可能。アーチ断面を水平に押し出したものである。広い空間を柱の数を少なく支えることができる。アーチ同様、小さな部材同士の圧縮軸力で構造が成り立つ性質をもつ。引張強度の小さい石材などで構成するのに適した構造のひとつ。

8) 飛梁

飛梁とは、ロマネスク時代には側廊屋根裏に隠されていたアーチを側廊屋根よりも高い位置に移して、空中にアーチを架けたものをいう。もともと建築物の外壁の補強のため、屋外に張り出す形で設置される柱状の部分をさす。この飛梁により、身廊ヴォールトのスラスト（推力）を高い位置で受け止めることにより、身廊の天井をそれまでの建築よりさらに高くすることができるようになった。また、推力を支持するための側廊により身廊上部が塞がれることがなくなったため、この部分に大きな窓をとることができるようになり、ステンドグラスなどの装飾を用いた壮大な礼拝空間が実現可能となった

9) 『名画の旅 天国へのまなざし 中世Ⅲ』 P60～61 講談社

新約聖書「ヨハネ福音書」には、次のようなキリストの有名な言葉がある。「私は世の光である。私に従う人は闇のなかを歩まず生命の光をもつであろう」（8：12）。聖堂内において、ろうそくやランプのほかに照明手段というものを持たなかった世の人々にとって、窓からさしこむ光はたんに物理的な意味を超えて、精神的な存在であると考えられていた。光は神の本質にかかわる崇高な存在であり、聖アウグスティヌス●のいう「光のなかの光」、つまり太陽光がそれに拠っているような光以前の光自体とでもよびうるものである。これは旧約聖書の冒頭、「創世記」の天地創造にあたって、「光あれ」といわれてつくられた光のことである。現実の太陽光線は、色ガラスという媒体を通じて、たんなる自然光から異次元の光へと変換され、精神的な聖なる光へと変質を遂げる。ステンドグラスの役割はこうした光の質的変換をはかることにあった。

10) スゲリウス[Suger]1081-1151

フランスの宗教家、政治家、歴史家。

1081年頃に、パリとサン＝ドニの間にあるアルジャントゥイユに生まれ、1091年、10歳の時にサン＝ドニ修道院に入る。そこで1094年に将来のルイ6世に出会い、学友として過ごす。その後、代官として修道院の荘園の経営に携わり、1122年に41歳でサン＝ドニ修道院の院長となる。修道院の腐敗の一掃に取り組むとともに、大規模な改修に着手した。1136年には最初のゴシック建築の聖堂であるとされるサン＝ドニ大聖堂の建設を開始し、聖堂は1144年6月11日に献堂された。

11) 聖ベルナルトゥス[Bernardus Claraevallensis, フランス語: Bernard de Clairvaux] 1090-1153

12世紀のフランス出身の神学者。すぐれた説教家としても有名である。フランス語読みでクレルヴォーのベルナル（聖ベルナル）とも呼ばれる。聖公会とカトリック教会の聖人であり、33人の教会博士のうちの一人でもある。

教皇ピウス 12 世からは「甘蜜博士 (Doctor Mellifluus)」の称号を贈られている。また第 2 回十字軍の勧誘に大きな役割を果たしたことで知られる。

12) シトー修道会慣例規則第 80 章

13) 『名画への旅(4) 中世Ⅲ 天国へのまなざし』p77

講談社 1992 安発和彰・木戸雅子・高野禎子・鐸木 道剛・富田知佐子・保井亜弓著・木村重信・高階秀爾・樺山紘一監修

14) ヤン・ファン・エイク [Jan van Eyck] 1395?-1441

初期フランドル派のフランドル人画家。15 世紀の北ヨーロッパで、もっとも重要な画家の一人と見なされている。1425 年ごろにブルッヘへと移住したファン・エイクはフィリップ 3 世に認められ、宮廷画家、外交官としてその宮廷に仕えるようになった。その後、トゥルネーの画家ギルドの上級メンバーに迎えられ、ロベルト・カンピンやロヒール・ファン・デル・ウェイデンといった、初期フランドル派を代表する画家たちと親交を持った。

15) ロベール・カンピン [Robert Campin] 1375?-1444

初期フランドル派の画家の一人。初期フランドル派最初の偉大なる画家とされることも多く「フレマールの画家 (Master of Flémalle)」の名で知られる。

16) ゲルハルト・リヒター [Gerhard Richter] 1932-

ドイツの画家、初期の頃から製作されているフォト・ペインティングは、新聞や雑誌の写真を大きくキャンバスに描き写し、画面全体をぼかした手法である。様々な色をキャンバスに載せスキージを引くことで生まれるイメージを作品化した「アブストラクト・ペインティング」や、幾枚ものガラスを用いて周囲の風景の映り込む作品などを製作している。幾つかの作品はデュシャンへのオマージュとして作成されている。またこれらの基礎資料であるかのような五千枚以上のドローイングや写真からなる数百を越えるパネルからなる作品として「アトラス」がある。

17) シグマー・ボルケ [Sigmar Polke] 1941-201

ドイツの画家、写真家。デュッセルドルフを拠点に活動した。1960 年代にゲルハルト・リヒターやコンラート・フイッシャーと「資本主義リアリズム」を標榜した絵画運動を始めて頭角を現し、リヒター、ゲオルグ・バゼリッツ、アンゼラム・キーファーらと並ぶドイツの現代絵画の旗手として知られる。

18) 『ガラスの技術史』 P197-198 第六章 板ガラス

アグネ技術センター, 2005 黒川高明

19) アン・フリードバーグ[Anne Friedberg] 1952-2009

アメリカ合衆国の映像メディア研究者。著作に『ウィンドウ・ショッピング——映画とポストモダン』1993『ヴァーチャル・ウィンドウ——アルベルティからマイクロソフトまで』2006 など

20) 『ヴァーチャル・ウィンドウ-アルベルティからマイクロソフトまで-』p153

産業図書, 2012年 アン・フリードバーグ著 井原慶一郎・宗洋訳

『ガラス建築』は「ただいくつかの窓からではなく、すべてガラスでできているありとあらゆる壁から……採光するのである。」「窓に類したあらゆるものは換気装置によって取って代わられる。シェーアバルトが心に描いたように、ガラス建築は窓の終焉を意味する。窓は、事実上、壁となるだろう。

クリスタル・パレス

21) 水晶宮 [The Crystal Palace]

1851年にロンドンで開かれた第1回万国博覧会の会場として建てられた建造物。ジョセフ・パクストン設計。鉄骨とガラスで作られた巨大な建物であり、プレハブ建築物の先駆ともいわれる。パクストンの設計では長さ約563m、幅約124mの大きさであった。なお、水晶宮という名称はイギリスの雑誌『パンチ』のダグラス・ジェロルドによって名づけられたものである。

特許磨き板ガラスが開発されていた頃、チャン・ブラザーズ社は磨いてない円筒法板ガラスの生産でも拡大を続けてきました。1850年、同社は、1851年に開催が予定されている万国大博覧会の会場として使われるジョセフ・パクストン(1801-65)の設計したクリスタル・パレス(水晶宮)に、ガラスを嵌め込む請負契約を審査のうえ得ました。

(中略)

この契約では、数カ月の間に、通常の生産に加えて200トンのガラスをつくることが要求されていました。ルーカス・チャンスの息子ロバート・チャンスは、この特別の追加の作業を遂行するために、30人の熟練した吹き手と契約し、フランスのルーアン近くのリヨン・ラ・フォーレの工場に送りました。従来の従業員も昼夜を分かたずに働くことを要求され、閉鎖されていたチャンス社の工場の一つも再開されました。生産量は連続的に増大し、1852年1月には2週間で60オンス(約1.7kg)の板が6万3千枚つくられました。この月の終わりまでに、作業は終了し、およそ100万平方フィート(約93,000㎡)の板ガラスがクリスタル・パレスに納入されました。

22) 『ヴァーチャル・ウィンドウ-アルベルティからマイクロソフトまで-』P150

産業図書, 2012年 アン・フリードバーグ著 井原慶一郎・宗洋訳

23) ジョセフ・パックストン [Sir Joseph Paxton] 1803-186

イギリス人造園家、建築家、政治家。第1回ロンドン万国博覧会（1851年）で水晶宮（クリスタル・パレス）を建設。またイギリスで最初に公園を設計し建設した人物とされる。庭の作品としては、シーデンハム宮庭園、公園では、バーゲンヘッド、チャッツワースのほか、1842年のリバプール・プリンズ・パークなどがある。

24) 『絵画論』P26 第一巻 絵画について

中央公論美術出版 著：レオン・バッティスタ・アルベルティ 訳：三輪福松

25) ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ [伊: Michelangelo Merisi da Caravaggio] 1571-1610年

バロック期のイタリア人画家。1593年から1610年にかけて、ローマ、ナポリ、マルタ、シチリアで活動し、カラヴァッジョ（Caravaggio）という通称で広く知られている。その作品に見られる肉体面、精神面ともに人間本来の姿を写實的に描く手法と、光と陰の印象的な表現はバロック絵画の形成に大きな影響を与えた。

26) アンリ・マティス [Henri Matisse] 1869-1954

フランスの画家。フォーヴィスム（野獣派）の画家として評された後も、20世紀を代表する芸術家の一人としてのちの時代にも影響を与えた。マティスは晩年体力的な問題から、油絵から切り紙絵へと政策方法を変更している。窓をモチーフとして描いた作品が多いのも特徴である。

27) ルネ・マグリット [René François Ghislain Magritte] 1898-1967

ベルギーの画家。サルバドール・ダリと並びシュルレアリスムの作家として知られる。日常にある具象的なモチーフを現実ではあり得ない情景として描く作品が有名である。1926年に描かれた『迷える騎手』が最初のシュルレアリスム作品とされている。一時パリに滞在し、フランスのシュルレアリストたちと交流するも、シュルレアリスム運動の理論的、およそ3年でブリュッセルへ戻り、以降ベルギーを離れることはほとんどなかった。

28) ロイ・リキテンシュタイン [Roy Lichtenstein] 1923 - 1997

アメリカ合衆国の画家。アンディ・ウォーホルらとともにポップ・アートの代表的な画家として知られる。新聞連載の通俗な漫画の1コマを、印刷インクのドット（網点・Ben-Day dots）まで含めてキャンヴァスに拡大して描いた作品群で有名。

29) 『デュシャンは語る』P133-134 「大ガラス」を通り抜けて

ちくま学芸文庫 著：ピエール・カバンヌ 訳：岩佐鉄男・小林康夫

- 30) オラ・ビルグレン[Ola Billgren]1940-2001
スウェーデンの画家。
- 31) 『デュシャンは語る』P080 何か別なものへの窓
ちくま学芸文庫 著：ピエール・カバンヌ 訳：岩佐鉄男・小林康夫
- 32) 『デュシャンは語る』P022 八年間の水泳訓練
ちくま学芸文庫 著：ピエール・カバンヌ 訳：岩佐鉄男・小林康夫
- 33) 『デュシャンは語る』P049 何か別なものへの窓
ちくま学芸文庫著 著：ピエール・カバンヌ 訳：岩佐鉄男・小林康夫
- 34) 『絵画論』P19-20
中央公論美術出版 著：レオン・バッティスタ・アルベルティ 訳：三輪福松
- 35) 『絵画論』P20
中央公論美術出版 著：レオン・バッティスタ・アルベルティ 訳 三輪福松
- 36) 『ヴァーチャル・ウィンドウ-アルベルティからマイクロソフトまで-』P33 序章 仮想の窓
産業図書，2012年 アン・フリードバーク著 井原慶一郎・宗洋訳
- 37) 『ヴァーチャル・ウィンドウ-アルベルティからマイクロソフトまで-』P41 序章 仮想の窓
産業図書，2012年 アン・フリードバーク著 井原慶一郎・宗洋訳
- 38) レオナルド・ダ・ヴィンチ[Leonardo di ser Piero da Vinci]1452-1519
イタリアのルネサンス期を代表する芸術家。絵画、彫刻、建築、音楽、科学、数学、工学、発明、解剖学、地学、地誌学、植物学など様々な分野に顕著な業績を残し、「万能人」と呼ばれる。代表作は『モナ・リザ』1503-1507や『最後の晩餐』1498年（サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院・ミラノ）など様々。
- 39) ジョナサン・クレーリー[Jonathan Crary]1951-
アメリカ出身の美術批評家
- 40) 『観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』P60-61 第二章 カメラ・オブスキュラとその主体
以文社，2005 著：ジョナサン・クレーリー 訳：遠藤知巳

41) カメラ・オブスキュラ [camera obscura]

「暗い部屋」の意味。主には画家が素描を描くために使われた光学装置として知られている。写真術発明にあたり重要な役割を果たした装置で、写真撮影用の機械を「カメラ」と呼ぶのはカメラ・オブスクラに由来する。

42) ギュスターヴ・クールベ [Gustave Courbet] 1819 - 1877

フランスの写実主義の画家。当時の世相や価値観に対して挑戦的な題材を描いた。クールベは、パリで行われた2回目の万国博覧会に大作『画家のアトリエ』と『オルナンの埋葬』を出品しようとするが、他の作品は審査を通過したにも関わらず、これらの大作は落選した。そこでクールベは博覧会場のすぐ近くに小屋を建て、「ギュスターヴ・クールベ作品展。入場料1フラン」という看板を立て、1855年6月28日から公開した。当時、画家が自分の作品だけを並べた「個展」を開催する習慣はなく、このクールベの作品展は、世界初の「個展」だと言われている。その作品そのものが持つ既存の美術への批評的な精神はデュシャンに近いところがあると言える。

43) 『美術手帳』1999年3月号 視きの美学 海野弘

44) 『マルセル・デュシャン論』P74 純粹の城

書肆風の薔薇, 1991 著:オクタビオ・パス 訳:宮川淳・柳瀬尚紀

45) エティエンヌ・ジュール・マレイ [Etienne-Jules Marey] 1830 - 1904

フランスの生理学者、医師。1882年、ライフル銃の形をした連続写真撮影機である写真銃を発明し、映画撮影機の原型となった。鳥の飛翔や人物の動きの連続写真を撮りその研究は絵画や、写真の歴史にも大きく影響を与えた。

46) マン・レイ [Man Ray] 1890-1976

アメリカ合衆国の画家、彫刻家、写真家。ダダイストまたはシュルレアリストとして、多数のオブジェを制作したことで知られる。レイヨグラフィ、ソラリゼーションなど、さまざまな技法を駆使し、一方でストレートなポートレート（特に同時代の芸術家のポートレート）も得意とし、ファッション写真と呼べるような作品もあつたりと、多種多様な写真作品群を残している。

47) アルフレッド・スティーグリツ [Alfred Stieglitz] 1864-1946

アメリカの写真家。近代写真の父と呼ばれる。1881年ドイツのベルリンポリテクニク留学中に写真化学を学んで写真を撮り始めた。1890年アメリカに帰って写真製版の仕事を始めるとともに欧州の写真芸術を母国に導入した。1902年グループ・フォト・セセッション (Photo-Secession) を設立、1903年に機関誌「カメラ・ワーク」を発行するなどピクトリアリズムを広めたがその後ストレートフォトグラフィに転じ、後世の多くの写真家に大きな影響を与えた。

48) LIFE (雑誌) 1936年11月23日に週刊誌として創刊

アメリカで発行されている雑誌。写真を中心とした誌面で「グラフ雑誌」と言われる。フォトジャーナリズムという文章記事よりも写真を中心に報道・言論を構成しようという考え方はすでにヨーロッパ(特にドイツ)で試みられていた。ライフ誌はカメラマンをスタッフという専属的な所属とし、撮影から記事・レイアウト等の編集のスタイルを一貫させ、「フォト・エッセイ」と称した。第二次世界大戦前から戦後復興期、テレビの本格普及前までが黄金期で、アメリカの思想・政治・外交を世界に魅力的に伝える媒体であった。創立者はヘンリー・ルース(英語版)1898年-1967年)、編集長はクルト・コルフ(Kurt Korff; 1876年-1938年)。

49) ロバート・スミッソン[Robert Smithson]1938-1973

アメリカ合衆国ニュージャージー州生まれの現代美術家。ランド・アート(アースワークス)と呼ばれる美術の潮流にかかわり重要な作品を残した。代表作ユタ州のグレートソルト湖で6500トンの岩、土砂、塩を使い造られた『スパイラル・ジェティ』(Spiral Jetty)など。

50) ピクトリアリズム[pictorialism,]

乾板写真が広く導入された後、1885年ころから流行した写真の潮流に与えられる名前である。写真技術の科学者と写真師は同じくくりで扱われていたが、このことに芸術としての写真を目指すものたちが不満をもったのが、ピクトリアリズム写真誕生のきっかけとされる。特徴としては、表現の特徴としては画面をぼかし、絵画の構図を意識しつくられたものが多い。写真それ一枚が作品となるように、その当時の絵画的な美意識が反映された造形されたイメージの写真作品といえる。アメリカではアルフレッド・スティーグリッツがこの運動を主導したが、のちにストレートフォトという写真独自の技術を用いた表現をしはじめる。

51) ストレートフォト[Straight Photography]とは、ぼかしや、画面構成についての演出、合成といった技巧を用いることなく、人間が見たままのようにシャープな視線で、あるがままの風景、人物等が撮影された写真作品およびそのような表現手段・表現形式のことである。19世紀から20世紀初頭のピクトリアリズムにおいて、ぼかしなどの技巧や被写体の配置を重視して、絵画的な作品を志向する傾向が著しく強かったのに対して、写真を絵画とは独立したものととらえ、写真(カメラ)本来の特性・独自の機能を重視し、写真にだけ可能な新しい表現形式を確立することによりその地位を高めることを目的として、アルフレッド・スティーグリッツらにより主張され始められた表現手段である。

52) 『空間のために 偏在化するスラム的世界のなかで』128p-129p

以文社 著:篠原雅武

53) アンフランランス (Inframince)

日本語では「極薄」「超薄」などと訳される「下の、下方の」という意味の接頭辞「infra-」と、「薄い」という意味の形容詞「mince」を組み合わせた M・デュシャンの造語であり、生前にはほとんど知られていなかったこの語は、デュシャンの死後 46 編のメモが発見され、1980 年にポンピドゥー・センターの回顧展カタログにその複製が掲載されたことで、一躍脚光を浴びることになった。デュシャン本人による定義が存在せず、また実在する作品との関係も明らかではないミステリアスな概念

54) 歌川広重[うたがわ ひろしげ]1797-1858

日本の浮世絵師。本名安藤鉄蔵。歌川広重の作品は、ヨーロッパやアメリカでは、大胆な構図などとともに、青色、特に藍色の美しさで評価が高い。この鮮やかな青は藍（インディゴ）の色であり、フェルメール・ブルー（ラピスラズリ）になぞらえて「ヒロシゲブルー」とも呼ばれる。歌川広重は、19 世紀後半のフランスに発した印象派の画家たちや、アール・ヌーヴォーの芸術家たちに大きな影響をあたえたとされ、当時ジャポニスムの流行を生んだ要因のひとつともされている。代表作としての『東海道五十三次絵』には西洋から導入された遠近法が用いられ、風や雨を感じさせる立体的な描写など、絵そのものの良さに加えて、当時の人々があこがれた外の世界を垣間見る手段としても、大変好評を博した。

《参考文献》

『ヴァーチャル・ウィンドウ-アルベルティからマイクロソフトまで-』産業図書, 2012年 アン・フリードバーク著 井原慶一郎・宗洋訳

『ガラスの技術史』アグネ技術センター, 2005 黒川高明

『ガラスの文明史』春風社, 2009 黒川高明

『マルセル・デュシャンと20世紀美術』朝日新聞社, 2004 国立国際美術館・横浜美術館編

『明るい部屋 写真についての覚書』みすず書房, 1985 ロラン・バルト著 花輪光訳

『マルセル・デュシャン論』書肆風の薔薇, 1991 オクタビオ・パス著 宮川淳・柳瀬尚紀訳

『マルセル・デュシャン』タッシェン・ジャパン, 2001, ジャニス・ミンク著

『鏡・空間・イマージュ』水声社, 1987 宮川淳

『ゲルハルト・リヒター 写真論/絵画論』淡交社, 2005 ゲルハルト・リヒター著 清水穰訳

『カラー版 世界写真集』美術出版社 2004 飯沢耕太郎監修

『カラー版 世界ガラス工芸史』美術出版社 2000 中山公男監修

『名画への旅(4) 中世Ⅲ 天国へのまなざし』講談社 1992 安発和彰・木戸雅子・高野禎子・鐸木 道剛・富田知佐子・保井亜弓著・木村重信・高階秀爾・樺山紘一監修

『観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』以文社, 2005 ジョナサン・クレーリー著 遠藤知巳訳

『ヴィクトリア&アルバート美術館展 ヴィクトリアの栄光 ~繁栄の時代の英国の生活文化~』NHKきんきメディアプラン, 1992 池上忠治総合監修 潮江宏三編・訳

『Atlas: Of the Photographs Collages and Sketches』Distributed Art Pub Inc 1997 Gerhard Richter 著 Lenbachhaus Munich 編集

『Banksy Locations & Tours: A Collection of Graffiti Locations and Photographs in London, England』PM Press, 2011, Martin Bull 編

『GERHARD RICHTER ゲルハルト・リヒター』 淡交社, 2005 金沢21世紀美術館・川村記念美術館監修

『Banksy *Wall and Piece.*』 2005 Century

Gerhard Richter, Helmut Friedel, ed. (2011) *Gerhard Richter. Atlas: Neuauflage.* Koenig,

『Gordon Matta-Clark 』 Phaidon ,2006 Corinne Diserens 著

『MARCEL DUCHAMP』 Thames and Hudson Ltd ,1988 ,Gloria Moure 著

『Marcel Duchamp: Étant donnés (Philadelphia Museum of Art)』 Michael R. Taylor 著 contributor : Andrew Lins
Melissa S.Meighan Beth A. Price Ken Sutherland Scott Homolka Elena Torok Publisher: Yale University Press First
Edition: August 25, 2009

『映像の修辞学』 ちくま学芸文庫 ロラン・バルト著 蓮實重彦/杉本紀子訳

『デュシャンは語る』 ピエール・カバンヌ 岩佐鉄男・小林康夫 訳 ちくま学芸文庫

『絵画論』 レオン・バッティスタ・アルベルティ 訳:三輪福松 中央公論美術出版

美術手帖 1980年4月号 美術出版社

美術手帖 1999年3月号 美術出版社

美術手帖 1997年1月号 美術出版社

美術手帖 1997年2月号 美術出版社

美術手帖 1997年3月号 美術出版社

ユリイカ2011年8月号 特集=バンクシーとは誰か 青土社

